

家庭生活に関する児童の認識の発達 ——総合カリキュラム研究のための基礎的視点——

家政学教室 米川 五郎・金沢扶巳代
中村喜美子・中村よし子
久世 妙子・村山 淑子

I 序 章

1. 本研究の経緯

本学の特定研究「子どもの認識様式にもとづく総合カリキュラムの開発について」では、研究を進めるに当たって、3つの研究グループを編成した。すなわち、①教育理念、②教育内容と教材、③教育制度である。筆者らは第3の教育制度グループに所属し、総合カリキュラムを具体的に実施する場合の諸問題を主な研究課題とした。

これまでの検討事項としては、次のようなものがあげられる。①合科学習および総合学習に関する過去の実践例の検討。主として木下竹次に関連する資料から生活と学習について有益な示唆を得た。②合科学習および総合学習に関する現代の実践例の検討。本学附属小学校の実践例をはじめとして、多数の実践例を調査検討した¹⁻⁶⁾。そこから、現在の教育現場における様々な試行例を分類整理した。なお、海外における実践例の一つとして、シュタイナー学校の実践例も取り上げた⁷⁾。以上のような文献研究を経て、③教育制度見直しのための基本調査の実施と児童期における認識の発達過程の調査を実施した。合科学習や総合学習を計画し、実施するには児童の認識の発達過程を明らかにする必要があるためである。

2. 本研究の意義

学問中心のカリキュラムに対し、人間中心のカリキュラムの必要性が主張されるようになってきた。たとえば、今回の学習指導要領の改訂に先立って公表された教育課程審議会の答申に掲げる教育課程の基準の改善のねらいの中に⁸⁾、「人間性豊かな児童生徒を育てること」や「ゆとりのあるしかも充実した学校生活を送れるようにすること」などが明示されている。さらに、小学校における各教科の編成について、学習指導要領では⁹⁾「低学年においては、児童の具体的かつ総合的な活動を通して知識・技能の習得や態度・習慣の育成を図ることを一層重視するという観点から合科的な指導を従来以上に推進するような措置をとることが望ましい」と具体的な指示がなされている。

ところで、合科的な指導や総合学習を通して、総合的な学習とか、豊かな人間性の育成

が行われることは何よりのことといえる。しかし、こうしたことが有効に行われるためには、児童の認識の発達段階が十分に把握されることが必要であろう。とくに、児童の認識における分析や総合が発達段階に従ってどのように変化するか、明確化することが必要と思われる。

従来の知見によると、小学校の連続的な発達過程の中で、低学年、中学年、高学年にそれぞれ質的な転換期が認められている^{10, 11)}。認識における分析力や総合力といったものが、これらの小学校の3つの時期を通じてどのように変化し、発達するものであろうか。

筆者らは、このような課題を明らかにするために、子どもの認識の対象として家庭生活を選ぶことにした。子どもにとって家庭生活は身近かなものであり、最も多面的な存在であり、子どもの認識における分析や総合のあり方を探るには最適なモデルと考えたためである。

次に報告する調査研究は、「子どもにとって家庭とはなにか（家庭の存在意義）」、「家庭にはどのような働きがあるか（家庭の機能）」、「家庭の仕事はどのように分担されているか（家庭の仕事の役割分担）」の3本の柱によって、児童の家庭生活に関する認識を発達的に明らかにしようとしたものである。

なお、この柱のたて方は日本家庭科教育学会の研究課題である「児童・生徒の発達と家庭科教育」の研究会で協議された家庭の捉え方でもある¹²⁾。

Ⅱ 調査研究

1. 調査の目的・方法

1) 目的

前述の研究目的に照して、小学生の家庭生活に関する認識の発達を、家庭の存在意義、家庭の機能、家庭の仕事の役割分担について調査し、その実態を明らかにする。

2) 調査方法

(1) 調査対象

対象児童は、岡崎市の中心部で、石工など地場産業地域にあるU小学校の2, 4, 6年生である。学年別、性別の人数は次のとおりである。

性 \ 学年	2	4	6	計
男	103	74	81	258
女	80	96	73	249
計	183	170	154	507

(2) 調査期日

昭和56年9月21日～26日

(3) 実施方法

実施にあたり現場の教師の意見を取り入れた。低学年では、理解しにくい選択肢をはぶいたり、表現をかえたりして、2年生用と4・6年生用の2種類の調査用紙を作成した。

全学年共、担任教師が授業中におこなった。2年生には、調査用紙をT Pで解説した。

2. 結 果

1) 対象児童の家庭環境

(1) 児童の家庭の家族構成

児童の家庭の家族員数は2～10人で、4～6人がそれぞれ20～30%と多く、一家庭の平均人数を、調査項目の「その他」の家族を省いて求めると、5.1人であった(表1-1)。

次に、家庭にその家族構成員がいる児童の人数と割合は表1-2のとおりである。祖父のいるものは25.2%、祖母のいるものは40.8%で、祖母の方が多く、祖父または祖母と同居している三世帯家族の児童は44.6%であった。父のいない児童は3.7%、母のいない児童は2.2%であったが、その割合は非常に小さかったので、「対象児童の家庭環境」以外の分析にあたっては、特に考慮しなかった。

注) 昭和55年国勢調査の結果によれば、子どものいる世帯のうち、18歳未満の親族のいる世帯の親族員数は全国平均4.4人で、三世帯家族は27.3%であった。対象児童の家庭は国勢調査の全国平均に比べて、祖父母との同居が多く、家族員数も多いといえよう。

表 1-1 児童の家庭の家族員数

学年	2		3		4		5		6		7		8以上		計	平均
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%		
2	3	1.6	8	4.4	52	28.4	48	26.2	48	26.2	18	9.8	6	3.3	183	5.1
4	1	0.6	9	5.3	47	27.6	41	24.1	49	28.8	16	9.4	7	4.1	170	5.2
6	2	1.3	7	4.5	51	33.1	43	27.9	26	16.9	17	11.0	8	5.2	154	5.0
全 体	6	1.2	24	4.7	150	29.6	132	26.0	123	24.3	51	10.1	21	4.1	507	5.1

表 1-2 児童の家庭の家族構成

学年	家族構成員 人	祖 父		祖 母		父		母		兄		姉		弟		妹		その他		祖父母と同居している	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
2	183	55	30.1	77	42.1	180	98.4	177	96.7	58	31.7	65	35.5	59	32.2	52	28.4	9	4.9	83	45.3
4	170	43	25.3	70	41.2	162	95.3	168	98.8	52	30.7	60	35.3	55	32.4	61	35.9	10	5.9	78	45.9
6	154	30	19.5	60	38.3	146	94.8	151	98.5	37	24.0	48	31.1	58	37.6	55	35.6	7	4.5	65	42.2
全 体	507	128	25.2	207	40.8	488	96.3	496	97.8	147	29.0	173	34.1	172	34.0	168	33.1	26	5.1	226	44.6

きょうだいの人数は、対象児童も含めて、1～6人で、平均2.5人であった(表1-3)。高学年では弟・妹を、低学年では兄・姉を有する割合が大きい傾向にあり、きょうだいの数は多いと考えられる。一人っ子は6.9%と少なかった。

注) 昭和55年国勢調査抽出速報集計結果その1全国編より算出

表 1-3 児童のきょうだい数

学年	きょうだい数 (人)		1		2		4		5		6		6		計	平均
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%		
2	15	8.2	90	49.2	61	33.3	14	7.7	2	1.1	1	0.5	183	2.5		
4	11	6.5	79	46.5	63	37.1	14	8.2	1	0.6	2	1.2	170	2.5		
6	9	5.8	78	50.6	54	35.1	6	3.9	3	1.9	4	2.6	154	2.5		
全 体	35	6.9	247	48.7	178	35.1	34	6.7	6	1.2	7	1.4	507	2.5		

注) きょうだい数には対象児童を含む

(2) 父母の年齢と職業

父母の年齢については、対象に低学年児童が入っていることを考慮して、10歳台くぎりですたずねた（付表1-1）。全体的にみて、父では30歳台と40歳台がともに多かったが、母では30歳台に集中していた。父母の年齢を知らない児童（NAには不明を含む、以下同じ）は、2年生でそれぞれ約10%存在し、他の学年に比べて多かった。

次に、父母の職業について、「勤め人」、「パート・内職」、「自営業」、「その他」、「なし」の項目から選ばせた結果が付表1-2である。父では「勤め人」62.7%、「自営業」28.3%であった。母では「自営業」23.0%、「勤め人」22.8%で、自営業の多いのは対象学区の特徴である。母の「なし」は25.8%で、4人のうち3人は何らかの形で働いていた。父母の職業を知らない児童は全体的にわずかであるが、低学年により多く、また、父と母とを比べると、母の方が多かった。

2) 家庭の存在意義

児童が家庭の存在意義をどのように認識しているかを調べるために、帰宅したときの気持とその理由について調査した。

4、6年生は、「その他」と「わからない」を含めた9項目の選択肢のなかから1つ選ばせた。2年生は、うれしい、ほっとする、元気が出るを合わせて「うれしい」項目とし、つまらない、きゅうくつ、家に入りたくないを合わせて「つまらない」項目とした。そのため5項目の選択肢の中から1つ選ばせた（図2-1、付表2-1）。その理由については、「その他」と「わからない」を含めた14項目の選択肢のなかから1つ選ばせた（付表2-2）。

(1) 帰宅したときの気持

帰宅したときの気持を考察するにあたり、各学年の「うれしい」「ほっとする」「元気がでる」を合せて「うれしい気持」とした。同様に「つまらない」「きゅうくつ」「家に入りたくない」を合せて「つまらない気持」とした（図 2-1、付表 2-1-2）。

i) 全体として、「うれしい気持」の割合が66.6%を占め、家庭を肯定的に受けとめている。次が「何とも感じない」で14.2%。「つまらない気持」は11.8%にすぎない。

ii) 学年別では、「うれしい気持」は、高学年になるに従って高くなり、逆に「つまらない気持」は、高学年になるほど低くなる（図 2-1）。

iii) 男女差は全体的に少ない。「つまらない気持」を選んだ児童のうち、2、4年生で女子の割合が高く、女子の方が家庭に対する不満の気持を強く表している。

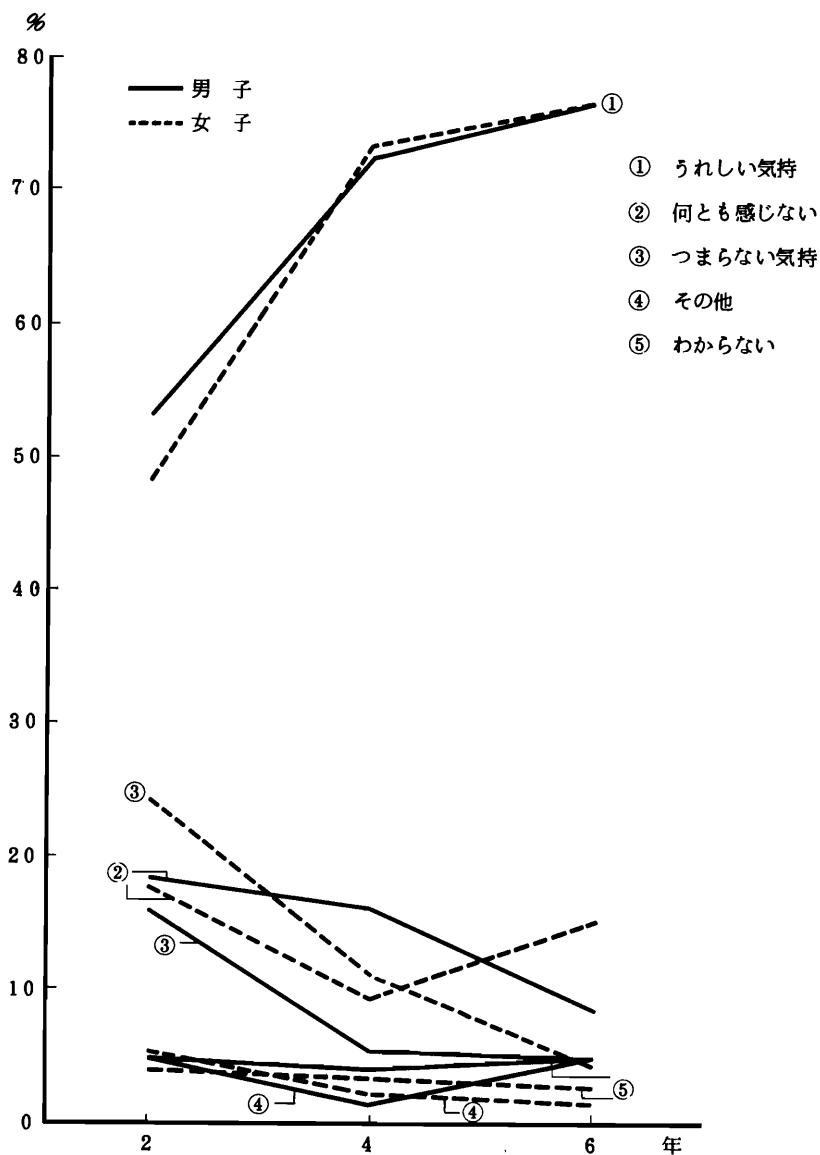


図 2-1 帰宅したときの気持

(2) 帰宅したときの気持とその理由

1) 全体として帰宅したときの気持とその理由を関連づけてみると (図 2-2, 附表 2-3), 「うれしい気持」の理由で多いのは「2. ゆっくりできる」33.4%, 「5. 自由である」26.3%, 「6. 家族と話ができる」12.7%, 「1. 家族の誰かがいる」10.1%である。「何とも感じない」理由は、「7. 家に帰るのが当然」38.9%をあげている。「つまらない気持」の理由は、「8. 家に帰ったとき誰もいない」40.0%, 「10. 家族がうるさい」11.7%である。したがって、児童が家庭に求めるものは、家に誰かがいて、話ができること、しかも自由であり、ゆっくりできることであるといえる。

ii) 学年別変化をみると、「うれしい気持」の理由として多くあげられた「2. ゆっくりできる」「5. 自由である」「6. 家族と話ができる」の3項目については、「2. ゆっくりできる」が高学年になるに従い高率となる。これは高学年ほど、家庭を安息の場としてとらえているといえる。他の2項目は、高学年になるほど低率となる。

「つまらない気持」の理由として多くあげられた「8. 家に帰ったとき誰もいない」「10. 家族がうるさい」は、ともに高学年になるに従い高くなる。また、2年生はつまらない理由が多くの項目にわたって選択されているのに対して、4, 6年生では前記2項目への集中度が高い。

iii) 男女差を帰宅したときの気持の理由(付表2-2)からみると、男子が高率なのは「2. ゆっくりできる」「5. 自由である」であり、女子が高率なのは「1. 家族の誰かがいる」「6. 家族と話ができる」である。

帰宅したときの気持 その理由	うれしい気持	何とも感じない	つまらない気持
1. 家族の誰かがいる	○○○ ●●●	●●●●	●●
2. ゆっくりできる	○○○○○○○ ○○○○●●●	●●●●●	●
3. 好きなものが食べられる	○●●●●●●		●
4. 安全である	●●●●●	●●●	
5. 自由である	○○○○○○○ ○●●●●●●●●	●●●●●	●●
6. 家族と話ができる	○○○○○●●●	●●	
7. 家に帰るのは当然	●●●●●	○○●●●●●●	●●
8. 家に帰ったとき誰もいない	●●●●	●●●●●●●	○○●●●●
9. しごきをさせられる	●	●●	●●
10. 家族がうるさい	●	●●	●●●●●●●
11. 家族の仲が悪い			●
12. 他に帰るところがない	●		●
13. その他	○●●●●	●●●	○
14. わからない	●●●●	○●	●●●●●●●

○10人, ●1人

図 2-2 帰宅したときの気持とその理由の関連

以上のように児童は、家庭の存在意義をどうとらえているかについて、帰宅したときの気持ちとその理由から調べたが、その結果、①全体にみて、家庭は、ゆっくりできる、自由であると同時に、家族と話ができる場としてとらえている。②学年別では、高学年になるに従い家庭をくつろぎの場としてとらえている。また、低学年は、要求が多様化し、家庭に対する期待が大きい。③男女差では、男子より女子の方がより家庭の存在を強く求めている。

3) 家庭の機能

児童が家庭の機能をどのように認識しているかを調べるために、①自分の家はどのようなところか、②自分の家をもっとよくするにはどうしたらよいか、の二方向から調べた。

(1) 家庭の機能の捉え方

ここでは、児童は「うちをどんどころだと思っているか」について調べた。「その他」と「わからない」を含めた12項目の選択肢のなかから3つ選ばせた(付表3-1)。

i) 全体として、選択数の多い項目は1位「4.親子がいっしょにくらす」21.7%、2位「9.家族がおもしろく楽しくすごす」18.2%、3位「6.子どもをりっぱな人間に育てる」14.2%、4位「8.病人・年よりを守り、家族がいたわりあう」13.9%である。児童の認識する家庭の機能とは、家族の共同生活の場であり、子どもや病人・老人を保護する場である。

ii) 学年別にみて、2年生が高率で高学年になるに従って低くなるのは、「1.子どもが生まれ育つ」、「5.食べもの、着るものなど必要なものがある」、「6.子どもをりっぱな人間に育てる」、の項目である。図3-1に学年別変化を傾向別に表した。

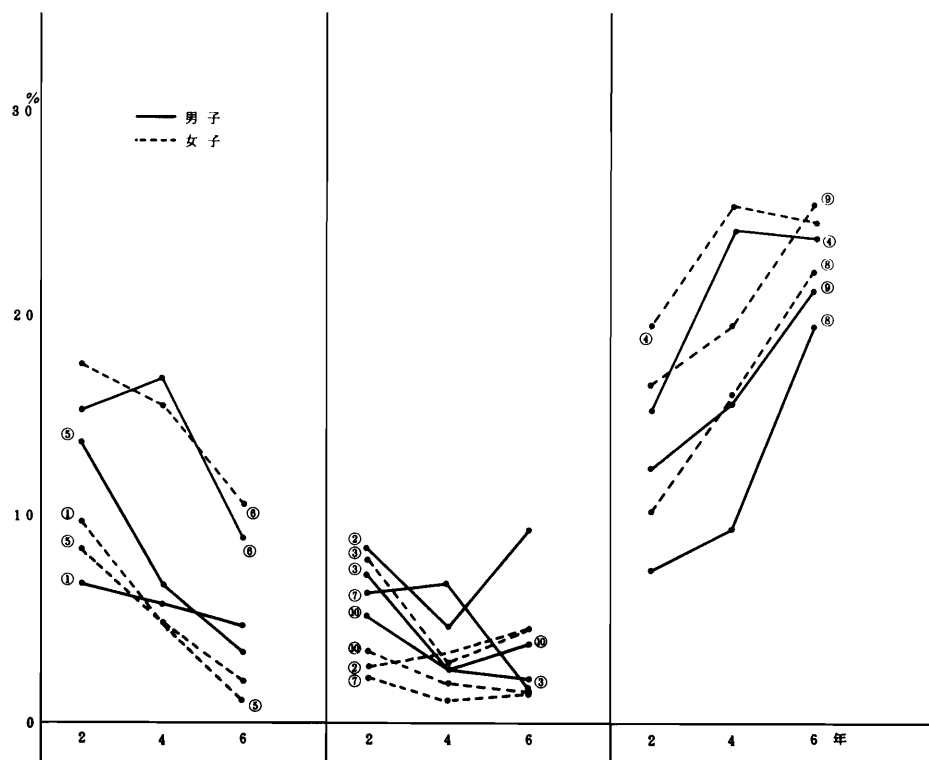


図 3-1 自分の家はどういうところか

高学年になるほど高率になっていくのは、「9.家族がおもしろく楽しくすごす」、「8.病人・年よりを守り、家族がいたわりあう」、「4.親子がいっしょにくらす」、といった家族全体の共同生活における精神的充実についての項目である。

「4.親子がいっしょにくらす」と「6.子どもをりっぱな人間に育てる」とは、共に親子の関係をとらえた項目であるが、両者は対照的な関係にある。2項目とも各学年で他の項目にくらべ高率であるが、「4.親子がいっしょにくらす」は2年生が低率であるのに対して、「6.子どもをりっぱな人間に育てる」は6年生で低率になっている。

iii) 男女差をみると、男子の方が高いのは、「2.寝たり休んだりする」、「5.食べもの着るものなど必要なものがある」、「7.習慣や財産を守る」の3項目である。これらの項目は、家庭を生活の場として捉え、そこでの物質的・生理的充足をはたす機能を重視する項目であり、学年別変化では高学年に行くほど選択率が低くなっていく傾向の項目である。女子の方が高いのは、「4.親子がいっしょにくらす」、「8.病人・年よりを守り、家族がいたわりあう」、「9.家族がおもしろく楽しくすごす」の3項目であり、家族の共同生活を重視する項目である。また、この3項目は高学年になるほど選択率の高くなる項目である。

(2) 自分の家庭の充実

ここでは、「あなたのおうちをもっとよくするとしたら、どうあったらよいと思うか」について、前問と同じ12項目について調べた。ただし、前問が一般的に「おうちとは」という問いかけであったのに対して、ここでは、「あなたのおうちは」と具体的に自分の家庭について考えさせる質問形成を使ったので付表3-2のように児童の立場から家庭を考えられるような問い方に変えてある。選択数は制限しなかった(付表3-2)。

i) 全体として、回答率が20%を越える項目はない。これは前問が3つ選択させたのに対して、ここでは無制限に選択させたので各項目間の回答率が平均化し、特定項目へ集中しなかったためである。%の数値はどちらも全選択数に対する割合である。

回答率10%以上の項目は、「9.家族がおもしろく楽しくすごす」17.8%、「4.父母が家に長くいる」12.7%、「8.病人・年よりなどを大切にする」12.0%である。この3項目は前問でも上位であった。

ii) 学年別に比較すると、第1に気が付くことは、6年生の一番高い回答率が「9.家族がおもしろく楽しくすごす」で25.1%と20%を越える高率であることである。一人あたりの選択数が、2年生5.1、4年生2.9、6年生2.2と高学年に行くほど少なくなる。即ち、6年生ほど回答率の高い項目への集中度が高い。それだけ児童間の考え方が同一化し、家庭の見方が単一化するといえる。低学年ほど多面的に捉えているのである。

高学年になるほど回答率の低くなる項目は「1.もっと子どもがたくさんいる」、「5.食べもの、着るものなどたくさんある」であり、前問と同じ傾向である(図3-2)。

高学年になるほど回答率の高くなる項目は前問と同じように、「9.家族がおもしろく楽しくすごす」と「8.病人・年よりなどを大切にする」、「4.父母が家に長くいる」の3項目である。「父母が家に長くいる」は前問の「親子がいっしょにくらす」にあたるので、学年別変化は、前問とほとんど同じ傾向であるといえる。

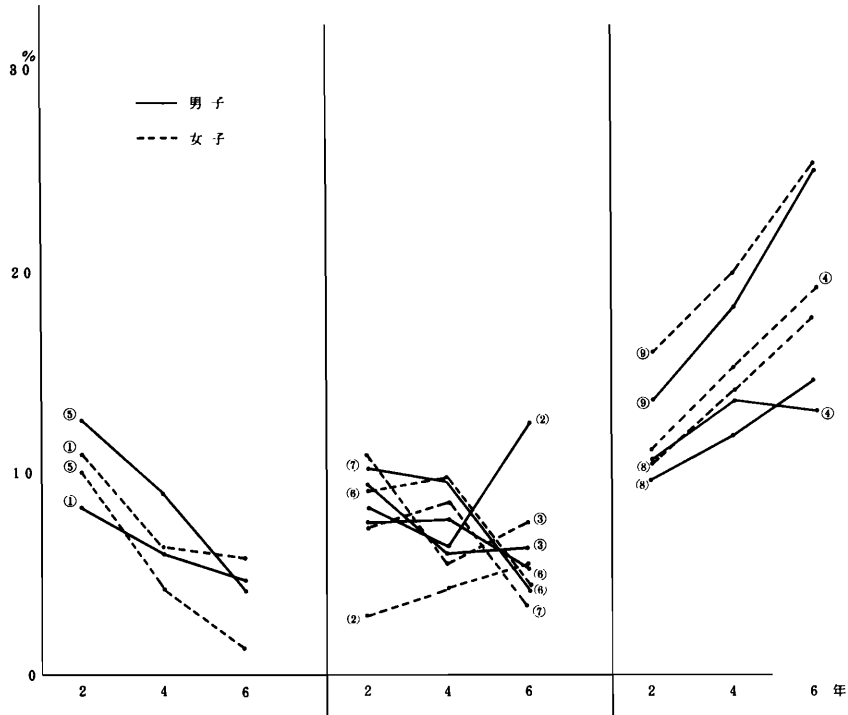


図 3-2 自分の家をよくするにはどうあったらよいか

iii) 男女差についても、前問と同じ傾向がみられる。男子の方が高率である項目、女子が高率である項目ともに同一項目で同じ傾向がみられる。ただ「1. もっと子どもがたくさんいる」という項目が、前問と表現方法が異なることもあるが、ここでは女子の方が高率である。

以上をまとめると、児童が家庭の機能をどう捉えているかについて、一般的なレベルでの意識と具体的なレベルでの意識について調査したが、その結果は両者同じような傾向を示した。①児童は、家庭とは家族がお互いに仲よく、楽しくすごす共同生活の場であり、子どもを育てる保育の場、病人や老人を大切にすると考えている。②発達的にみると、食べ物、着るものなど物質的なものや寝る、休む、習慣など生理的身体的な充足をはかる場であるという認識が低学年より高学年にいくほど低くなる。逆に家族の人間関係など精神的側面を充実させる機能を重視する傾向は高学年にいくほど強くなる。③男女差では、男子の方が女子より各学年を通じて物質的・生理的充足を家庭に求める傾向が強い。しかし、この傾向は②との関連からみると女子の方が発達的变化である物質的・生理的充足より精神的充実へ移行するのが早いのではないかと推測できる。この傾向が性による差か、発達の遅速による差かは今後の検討課題である。

4) 家庭の仕事の役割分担

(1) 児童の役割分担

a. 全体

児童が、家庭の仕事をつだんどの程度行っているのかについて、役割分担の様子を、児

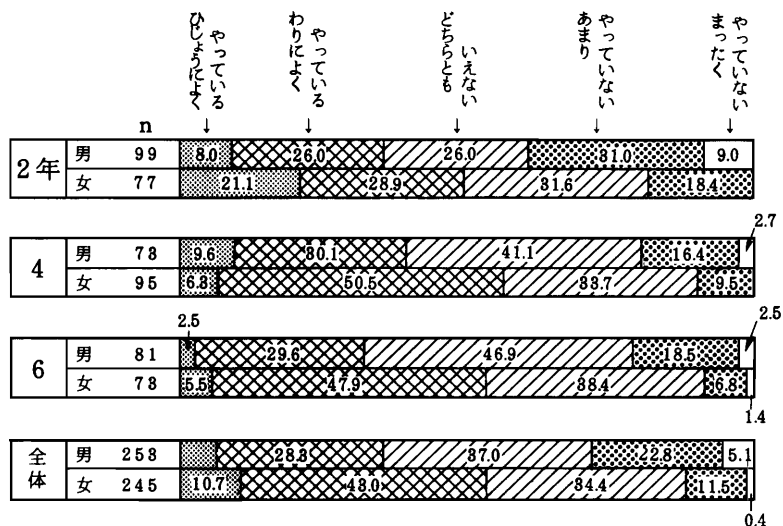


図 4-1 児童の役割分担 (全体)

童の意識として「非常によくやっている」から「まったくやっていない」まで5段階に評価させた(図4-1, 付表4-1)。

i) 全体として、家庭の仕事「非常によくやっている」児童は10%もおらず、「わりによくやっている」まで含めても50%未満で、一般的に、児童は、家庭の仕事をしていないようである。しかし、回答のうち「どちらともいえない」が35.7%も占めており、自己評価による判断がつきにくい者が多くみられた。

ii) 学年別に比較すると、学年がすすむにつれて、「非常によくやっている」が減少しているが、「わりによくやっている」まで含めてみると、学年間にはあまり違いはみられない。どちらかといえば、むしろ2年生から4年生で仕事をしている割合はやや増加し、6年生になるとまた少し減少している。高学年になると、勉強時間が増えるため、家庭の仕事をする割合が低くなると考えられる。また、学年がすすむにつれて、「非常によくやっている」「まったくやっていない」と思っている者が減少し、逆に「どちらともいえない」と思っている者が増加している。

iii) 男女差をみると、「非常によくやっている」「わりによくやっている」割合は、女子の方が男子に比べて多い。また、「あまりやっていない」「まったくやっていない」割合は、女子が男子に比べて少なく、全体的にみて、女子の方が男子よりも家庭の仕事をしているようである。しかし、4年生についてのみ、「非常によくやっている」割合は、女子より男子の方が多い。

b. 事項別

家庭の仕事の中で、児童が、具体的にどのような仕事を、どの程度行っているかを知るために、衣生活、食生活、住生活、家庭経営などの側面から6項目をあげ、「いつもする」「ときどきする」「ほとんどしない」の3段階に評価させ、また、そうする理由について調査した(付表4-2)。

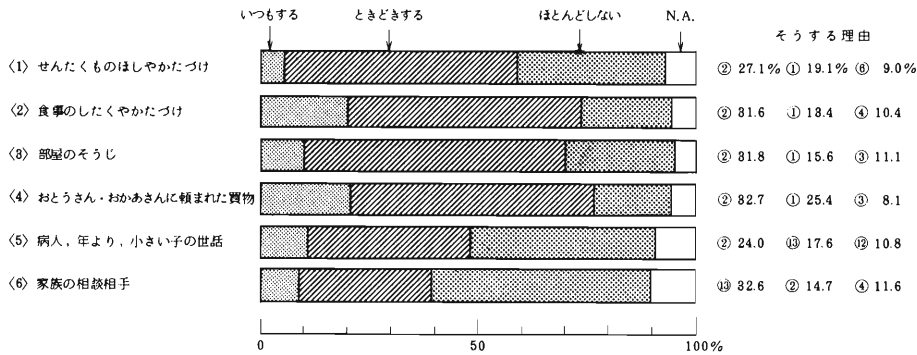


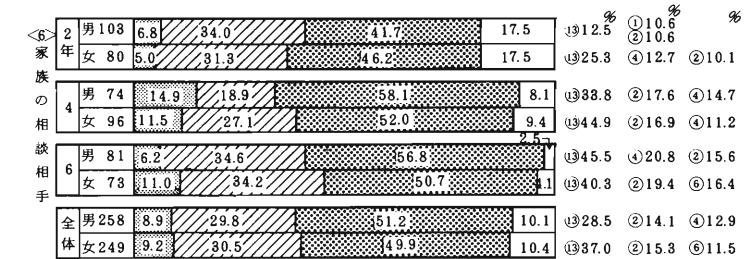
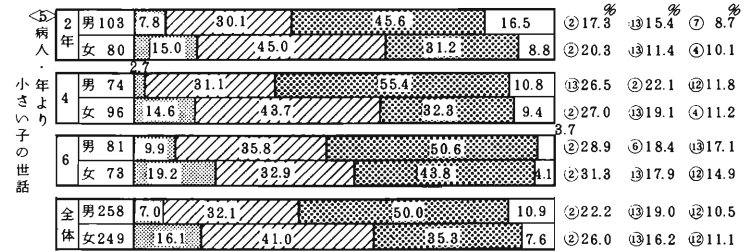
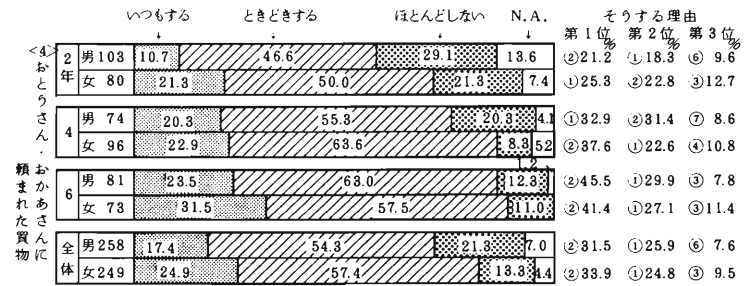
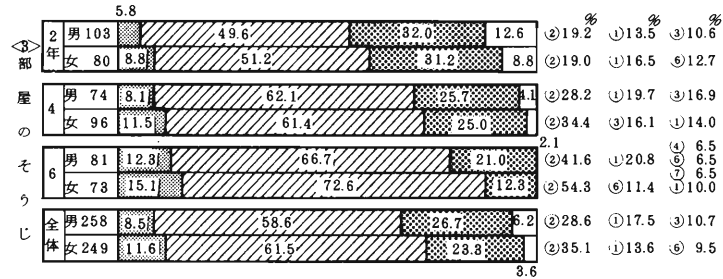
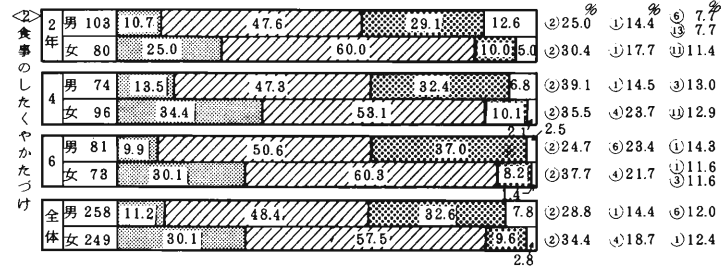
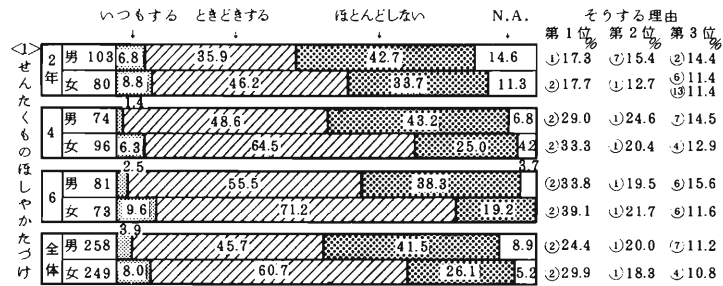
図 4-2 児童の役割分担 (事項別)

i) 全体として(図4-2)、項目によりその仕事を行う機会の頻度がふだんの生活の中で異なるため、一概に比較して述べることはできないが、各項目ともに、児童は家庭の仕事をあまり行っていないようである。「いつもしている」割合をみると、一番多い④買物でさえ21.1%、次いで②食事のしたくやかたづけ20.5%で、他は約10%または10%以下となっている。「ときどきする」まで加えてみても、④買物76.9%、②食事のしたくやかたづけ73.4%、③部屋のそうじ70.1%、①せんたくもの干しやかたづけ59.0%で、⑥家族の相談相手、⑤病人・年より・小さい子の世話は、半数以下しか行っていない。

ii) 学年別に比較すると(図4-3)、①せんたくもの干しやかたづけ、③部屋のそうじ、④買物の項目において、学年がすすむにしたがって、その仕事をしている割合が高くなる傾向がみられた。②食事のしたくやかたづけ、⑤家族の相談相手、⑥病人・年より・小さい子の世話の項目では、学年による違いはあまりみられない。

iii) 男女差をみると(図4-3)、⑥家族の相談相手の項目で「いつもしている」割合が女子より男子の方が高い(2年生、4年生)以外は、すべての項目について、女子の方が男子より家庭の仕事をしている割合が高い。特に、②食事のしたくやかたづけでは著しく、低学年の頃からすでに男女差がはっきりしている。また、①せんたくもの干しやかたづけでは、学年がすすむにしたがって、男女差は大きくなる傾向がみられた。

次に、「そうする理由」についてみると、全項目を通じて、「自分にできることだから」が上位にあげられている。次いで、①～④の項目では、「父母に言いつけられるから」があげられている。また、注目されるのは、①せんたくもの干しやかたづけでは、男子に「仕事が嫌いだから」が多くあげられ、また②食事のしたくやかたづけでは、女子に「自分が家庭をつくるとき役立つと思うから」「女だから」が多くあげられている。なお、⑤病人・年より・小さい子の世話、⑥家族の相談相手では、「わからない」が上位を



① 父母に言いつけられるから ② 自分にできることだから ③ みんな動いているから ④ 自分が家庭をつくるとき役立つと思うから ⑤ 家庭科で勉強したから
 ⑥ 自分以外の家族がしてしまうから ⑦ 仕事が嫌いだから ⑧ 自分が大きくなったとき役立つと思わないから ⑨ 家庭科で勉強したことが家のやり方が違うから ⑩ 男だから ⑪ 女だから ⑫ あてはまる仕事がないから ⑬ わからない

図 4-3 児童の役割分担 (事項別, 学年・性別)

占めているが、これは、対象児童の家庭に該当者がいなかったり、設問内容が具体性に欠けたためと思われる。

以上のように、家庭の仕事について、児童は、全体としてあまり仕事をしていない傾向がみられた。学年別にもほとんど違いはみられないが、せんたく・そうじ・買物などについては学年がすすむにしたがい、仕事をする割合が増加している。男女差をみると、全体として、女子の方が男子より仕事をしており、特に、食事のしたく、せんたく、といったいわゆる家事において、著しい差がみられた。

(2) 家族の役割分担

〈1〉子どものしつけ、〈2〉近所とのつきあい、〈3〉親類とのつきあい、〈4〉生活するお金を家庭へ入れる、〈5〉学校の集まり（PTA）に出る、の5項目について、その仕事は誰がすればよいかを、「父」「母」「おじいさん」「おばあさん」「おにいさん」「おねえさん」「その他」「わからない」の選択項目の中からそれぞれ一つ選ばせた。2年生については、各項目について該当する選択項目をいくつでも選ばせた。結果は付表4-3に示したが、回答は、主として「父」「母」が多くあげられていたので、選択項目のうち、「おじいさん」「おばあさん」「おにいさん」「おねえさん」「その他」をまとめ、「その他」と表わした。

i) 全体としてみると、〈1〉子どものしつけ、〈2〉近所とのつきあい、〈5〉学校の集まりに出る、の項目については、担当者として「母」をあげた割合が多く、各々、66.7%、58.0%、72.6%である。一方、〈4〉生活するお金を家庭へ入れる、については、「父」が76.1%と多くあげられている。また、〈2〉近所とのつきあい、では、「父」34.1%、「母」33.8%に次いで「その他」18.6%があげられ、他の項目に比べ、父母の役割分担とする割合が少なく、その他の家族員、特に祖父母の役割分担とする割合が多い傾向がみられた。

ii) 学年別については、2年生のみ複数回答のため、4、6年生と単純に比較できないので、ここでは、4年生、6年生について比較する。4年生に比べて6年生では、各項目とも、「その他」とする割合が減少している。そして、〈1〉子どものしつけ、〈3〉親類とのつきあい、〈4〉生活するお金を家庭へ入れる、〈5〉学校の集まりに出る、の項目では、「父」の割合が増加している。また、〈2〉近所とのつきあい、〈4〉生活するお金を家庭へ入れる、〈5〉学校の集まりに出る、の項目では、「母」の割合も増加しているが、増加の割合は「父」に比べ少ない。

iii) 男女差をみると、〈1〉子どものしつけ、〈2〉近所とのつきあい、について、女子の方が「母」をあげた割合が高く、母の役割分担と考えているようである。

以上のように、家庭の仕事について家族の役割分担をみると、父母の役割が大きく、中でも、生活費を得る役割で父があげられた以外は、全体として、いわゆる家庭の仕事は母の役割と受けとめられているようである。また、6年生では、「その他」の家族員の役割分担とする割合は減少し、父母に集中してくる傾向がみられた。

(3) 男女による役割分担の違い

児童が家庭の仕事をするのに、男女によって役割分担の違いがあると認識しているかどうか調べた（図4-4、付表4-4）。

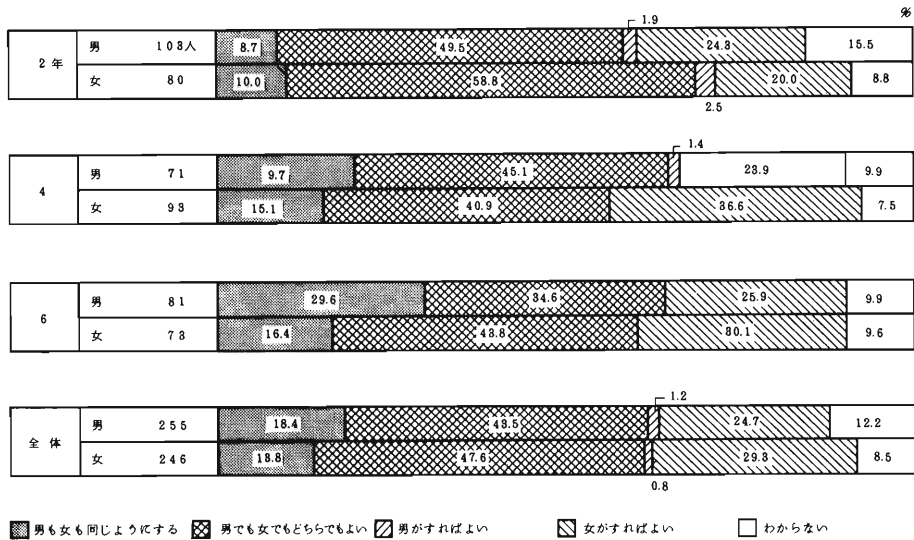


図 4-4 男女による役割分担の違いの認識

i) 全体的にみて、家の仕事をするのに「男でも女でもどちらでもよい」が、最も多く44.5%で、約半数が性による役割分担を特に意識していなかった。次いで、「女がすればよい」が26.9%、「男も女も同じようにする」が16.2%であり、「わからない」は10.4%みられた。「男がすればよい」は1.0%と非常に少なかった。

ii) 学年別にみると、「男でも女でもどちらでもよい」は各学年で最も高率であるが、高学年になるにしたがって低くなる。反面、「男も女も同じようにする」は学年が進むにつれて高くなっていった。「女がすればよい」と「わからない」では学年による差はみられなかった。「男がすればよい」は低学年でわずかにみられたが、高学年ではみられなかった。次に、男女を分けて学年別にみると、男子では学年が進むにつれて、「男でも女でもどちらでもよい」が減少し、「男も女も同じようにする」が増加しているのに対して、女子では2年生から4年生にかけて同様の傾向があるものの、4年生と6年生には差はみられなかった。

iii) 男女差については、各学年を合わせて男女で比較すると、いずれの項目にも差はみられなかった。しかし、学年ごとにみると、「男も女も同じようにする」で6年生の男子が高率であった。

以上のことから、性別役割分担の違いの認識は、学年が進むにつれて、「男でも女でもどちらでもよい」といった未分化なものから「男も女も同じようにする」といった認識に変わっていく傾向がみられ、この傾向は女子よりも男子に強かった。また、「男も女も同じようにする」と「男でも女でもどちらでもよい」といった性による役割分担を特に区別しないものが半数を越えており、一方、「女がすればよい」が各学年の男女とも20~30%を示し、「男がすればよい」がほとんどみられなかった。

以上をまとめると、家庭の仕事の役割分担について、児童の手伝いの実際、家庭の仕事

は誰がすればよいか、家庭の仕事をするのに男と女で違いがあるか、の3点から調べた。

その結果、

①児童は、家庭の仕事をしているという自己評価は全体として低い、具体的に最も日常的に行われる仕事（せんたく、食事のしたく、そうじ）については、しているという児童の割合は比較的高い。また、これらの家庭の仕事の手伝いは、学年がすすむにしたがい、仕事をしているとする児童の割合は高くなるものが多い。さらに、全体として、男子より女子の方が、しているという児童の割合は高く、男女差がみられる。

②家庭の仕事の役割分担は、家族の中では父母に集中し、収入以外の仕事では母親がすればよいと考えている児童が多くみられた。

③性別役割意識は、「男も女も同じようにする」と「男でも女でもどちらでもよい」が合わせて約60%みられるものの、「男がすればよい」がほとんどないのに対し、「女がすればよい」が約30%もみられ、このような考えが、児童の手伝いの実際にみられた男女差や家族の役割分担が母に集中して考えられていること背景となっているのではないかと考えられる。

Ⅲ 家庭生活に関する児童の認識の発達と総合カリキュラム

1. 家庭生活に関する児童の認識の発達

小学校2, 4, 6年生を対象に家庭生活に関する児童の認識についての調査を実施した。小学校6年間は、発達段階では児童期としてまとめて考えられるが、児童の認識の発達を中心にみれば、ピアジェが指摘したように、前期は直観的思考期（4～7, 8才ころ）、中期は具体的操作期（7, 8～11, 12才ころ）、後期は具体的操作期から形式的操作期（11, 12～14, 15才ころ）と変化する時期である。また、児童と家庭生活や家族とのかわり方においても、前期は親に依存し、家庭を拠点として学校や地域社会の生活へと活動が広がっていたのに対して、後期では親からの自立がはじまり、家庭、学校、地域社会での児童の行動がそれぞれ分化し、家庭生活が児童の行動全体に与える役割の位置づけがはっきりしてくる。

今回の調査は、家庭の存在意義、家庭の機能および家庭の仕事の役割分担の3点から児童の認識を調べたが、その結果から次のような発達の発達が認められた。

①未分化から分化へ

児童は低学年ほど、家庭への要求が多様であり、多くの役割や機能を求めているが、高学年になると、類型化し家庭に求めるものがはっきりしてくる。

②具体的思考から一般的思考へ

低学年ほど日常生活の具体的な行動と結びついた次元で家庭を認識しているが、高学年になると、児童以外の家族の生活も含めて総合的、一般的に考えるようになる。

③生理的物質的充足から精神的充実へ

低学年ほど、食べ物や着るものがあること、寝たり休息の場として家庭を捉える傾向が強いのにに対して、高学年では家族の共同生活や精神的充実の場としての認識が高くなる傾向がある。

家庭生活を対象とした認識は、小学校低学年では日常生活の中で経験的に身につけるもので、ヴィゴツキーのいう生活的概念に属するものであるが、これを科学的概念に高めるために総合カリキュラムのテーマとして取り上げることを考えた。¹³⁾

2. 家庭生活に関する総合カリキュラム

前項で述べたことから総合カリキュラムにおいて家庭生活に関する教育を次のように行うことが望ましいと考える。

①低学年—生活を中心とした総合学習

多くの総合学習の研究において生活学習として総合学習を行った研究例が多い。日常生活の中で経験的に身につけてゆく、ヴィゴツキーのいう生活的概念を、科学的概念に高める初段階の学習といえよう。これまでの多くの研究は主として理科、社会科、図画工作を基とした総合学習が多くみられた。しかし現在5学年6学年の教科として位置づけられている家庭科における家庭生活に関する学習も、次の理由から低学年の総合学習に導入されることが望まれる。(i)生活とは人間が生命を維持し意識をもって活動することであるから低学年の総合学習では児童が生きてゆく基本的な事項を学習することが必要であり、食・衣・住に関わる具体的な経験を通して、児童が生活を自立的に行うことを進めることができるようにする必要がある。(ii)前項1でも述べたように児童前期の生活は家庭を拠点として学校や地域社会の生活へと活動が広がるが、低学年においては、家庭の生活及びその延長としての生活は児童に身近かで学習することが容易である。(iii)調査研究4)児童の仕事の分担にもみられるように、低学年からある程度、家庭の仕事を行っていることもみられるので、児童に適する具体的な行動を行う総合学習により、生活に関する科学的概念を培う素地を養うものとするができる。

②高学年—教科における系統学習と総合学習

児童後期は認識作用は分化し形式操作期と変化する時期であるので教科別学習が行われることになるが、家庭生活に関する学習は独自の学習領域を持ち、学習者の能力の発達に寄与するので、家庭科として位置づけ系統的に学習を行う。第4学年から置かれることが望ましい。それは次の理由によるものである。(i)家庭生活は人間の個人の生活の基盤であると共に、社会の基礎的単位であり、その教育は個人にとっても社会にとっても必要である。(ii)分化と総合を体系的に学習させる機会を与える。衣生活、食生活、住生活、家庭経営は家政学の分科を基礎とするそれぞれ独自の科学的背景を持ちながら、家庭生活遂行において総合される分化と総合の体系を持つからである。(iii)家庭生活に関する認識のみならず技術的能力を育成し、知識と技能を総合し、生活の向上を実現する資質を養う独自の体系を持つ。(iv)具体的な生活の体験を通し生活の科学的認識を深めるが、本調査研

究4)の(3)にもみられるように、家庭生活遂行の男女の役割り分担の認識は固定化されていないので、小学校高学年が学習の適時と考えられる。(V)本調査2), 3)にみられるように家庭生活に関する認識の発達は生理的充実から精神的充実に向かうことは明らかで、小学校高学年において家庭生活に関する認識を高め、正しい家庭観ひいては人生観を育成することが望まれ、また有効に指導ができると考えられる。

教科外総合学習においては他の多くの教科と総合的に一つのテーマに取り組むことができよう。家庭科を構成する被服、食物、住居、家族、家庭管理、家庭経済、家族関係、保育の各領域が、個別にあるテーマに参加することもできよう。消費者教育も多数教科による総合学習としてのよいテーマとなるであろう。

また、家庭生活に関する総合学習としては、児童主体の活動により家庭科での学習を生活に総合的に実践するよう組立てることも考えられる。例えば、夏期合宿の生活の計画と実施は衣・食・住・生活経営を含めて総合的に実施することができ、またその他多くのテーマを組むことができよう。

最後に、今回の調査研究を実施するに当りご協力をいただきました岡崎市立U小学校の荻野富義校長先生はじめ諸先生に深く感謝いたします。また、調査結果の集計にあたりましてご援助やご教示をいただきました本学教育学センターの清水秀美先生に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 榊原康男「教育の革新と社会科」—総合カリキュラムへの展望— 愛知教育大学教科教育センター研究報告・第5号(1981) 182—185
- 2) 愛知教育大学附属岡崎小学校「自己深化をはかる授業」 生活教育研究紀要29(1978)
- 3) 愛知教育センター「小学低学年における合科的な指導の研究と実践」(1980)
- 4) 長岡文雄「合科教育の開拓」 黎明書房(1978)
- 5) 中野光編「学習原論」 世界教育学選集64 明治図書
- 6) 信州大学附属長野小学校「総合学習の主張」 明治図書(1975)
- 7) 子安美知子「ミュンヘンの小・中学生」—シュタイナー学校を中心に— 総合カリキュラム研究会資料—1980. 10. 31講演—(1980)
- 8) 教育課程審議会「小学校・中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」(1976)
- 9) 文部省「小学校学習指導要領」(1977)
- 10) 久世妙子他「発達心理学入門」 有斐閣(1978)
- 11) 小嶋秀夫「児童期の発達課題と教育」 教育学講座「3 発達と環境」 学習研究所(1979) 104—127
- 12) 日本家庭科教育学会「家庭科教育共同推進委員会第一次報告」(1981)
- 13) 柴田義松他「科学的認識の発達と教育」 岩波講座「子どもの発達と教育5」「少年期発達段階と教育2」 所牧 岩波書店(1979)
- 14) 米川五郎ほか「家庭生活に関する児童の認識—家族の役割り分担について—」 愛知教育大学研究報告・第30輯(芸術・保健体育・家政・技術科学編)(1981)

付表 1-1 父母の年齢

学年・性	年齢		20～29		30～39		40～49		50～		N A		計
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人
父	2	33	1.7	104	57.8	43	23.9	9	5.0	21	11.7	180	
	4	0	0	82	50.6	72	44.4	6	3.7	2	1.2	162	
	6	0	0	53	36.3	89	61.0	3	2.1	1	0.7	146	
	男	3	1.2	120	48.4	101	40.7	11	4.4	13	5.2	248	
	女	0	0	119	49.6	103	42.9	7	2.9	11	4.6	240	
	全体	3	0.6	239	49.0	204	41.8	18	3.7	24	4.9	488	
母	2	13	7.3	126	71.2	21	11.9	1	0.6	16	9.0	177	
	4	5	3.0	137	81.5	25	14.9	0	0	1	0.6	168	
	6	0	0	108	71.5	40	26.5	1	0.7	2	1.3	151	
	男	11	4.3	180	70.9	48	18.9	1	0.4	14	5.5	254	
	女	7	2.9	191	78.9	38	15.7	1	0.4	5	2.1	242	
	全体	18	3.6	371	74.8	86	17.3	2	0.4	19	3.8	496	

付表 1-2 父母の職業

学年・性	職業		勤め人		パート・内職		自営業		その他		なし		N A		計
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人
父	2	120	66.7	4	2.2	49	27.2	2	1.1	0	0	5	2.8	180	
	4	91	56.2	1	0.6	51	31.5	18	11.1	0	0	1	0.6	162	
	6	95	65.1	0	0	38	26.0	13	8.9	0	0	0	0	146	
	男	160	64.3	2	0.8	70	28.1	14	5.6	0	0	3	1.2	249	
	女	146	61.1	3	1.3	68	28.5	19	7.9	0	0	3	1.3	239	
	全体	306	62.7	5	1.0	138	28.3	33	6.8	0	0	6	1.2	488	
母	2	37	20.9	31	17.5	42	23.7	5	2.8	51	28.8	11	6.2	177	
	4	38	22.6	27	16.1	42	25.0	19	11.3	40	23.8	2	1.2	168	
	6	38	25.2	29	19.2	30	19.9	13	8.6	37	24.5	4	2.6	151	
	男	59	23.1	48	18.8	56	22.0	19	7.5	61	23.9	12	4.7	255	
	女	54	22.4	39	16.2	58	24.1	18	7.5	67	27.8	5	2.1	241	
	全体	113	22.8	87	17.5	114	23.0	37	7.5	128	25.8	17	3.4	496	

付表 2-1 帰宅したときの気持

付表 2-1-1

項目	2 年			4 年			6 年			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
1. うれしい	56	39	95	18	34	52	11	14	25	85	87	172
2. ほっとする	—	—	—	21	31	52	41	40	81	62	71	133
3. 元気がでる	—	—	—	15	6	21	10	2	12	25	8	33
4. 何とも感じない	19	14	33	12	9	21	7	11	18	38	34	72
5. つまらない	19	19	38	3	10	13	3	3	6	25	32	57
6. きゅうくつ	—	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7. 家にはいりたくない	—	—	—	1	1	2	1	0	1	2	1	3
8. その他	5	4	9	1	2	3	4	1	5	10	7	17
9. わからない	5	3	8	3	3	6	4	2	6	12	8	20
計	104	79	183	74	96	170	81	73	154	259	248	507

付表 2-1-2

項目	2 年			4 年			6 年			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
① うれしい気持	56	39	95	54	71	125	62	56	118	172	166	338
② 何とも感じない	19	14	33	12	9	21	7	11	18	38	34	72
③ つまらない気持	19	19	38	4	11	15	4	3	7	27	33	60
④ その他	5	4	9	1	2	3	4	1	5	10	7	17
⑤ わからない	5	3	8	3	3	6	4	2	6	12	8	20
計	104	79	183	74	96	170	81	73	154	259	248	507

付表 2-2 帰宅したときの気持の理由

項目	2年		4年			6年			全体			
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %	人 %
1. 家族の誰かがいる	9 8.9	9 11.7	18 9.8	4 5.5	8 8.4	12 7.1	2 2.5	8 11.0	10 6.5	15 5.9	25 10.2	40 7.9
2. ゆっくりできる	10 9.9	6 7.8	16 8.7	21 28.8	17 17.9	38 22.4	35 43.8	31 42.5	66 42.9	66 26.0	54 22.0	120 23.7
3. 好きなものが食べられる	4 4.0	0 0	4 2.2	6 8.2	5 5.3	11 6.5	4 5.0	1 1.4	5 3.3	14 5.5	6 2.4	20 3.9
4. 安全である	2 2.0	3 3.9	5 2.7	0 0	2 2.1	2 1.2	0 0	1 1.4	1 0.7	2 0.8	6 2.4	8 1.6
5. 自由である	23 22.8	9 11.7	32 17.5	16 21.9	23 24.2	39 22.9	18 22.5	10 13.7	28 18.2	57 22.4	42 17.1	99 19.5
6. 家族と話ができる	6 5.9	10 13.0	16 8.7	7 9.6	16 16.8	23 13.5	2 2.5	7 9.6	9 5.8	15 5.9	33 13.5	48 9.5
7. 家に帰るのは当然	9 8.9	4 5.2	13 7.1	6 8.2	6 6.3	12 7.1	4 5.0	6 8.2	10 6.5	19 7.5	16 6.5	35 6.9
8. 家に帰ったとき誰もいない	9 8.9	12 15.6	21 11.5	5 6.8	5 5.3	10 5.9	2 2.5	2 2.7	4 2.6	16 6.3	19 7.8	35 6.9
9. しごとをさせられる	3 3.0	2 2.6	5 2.7	0 0	0 0	0 0	1 1.2	0 0	1 0.7	4 1.6	2 0.8	6 1.2
10. 家族がうるさい	2 2.0	5 6.5	7 3.8	2 2.7	1 1.1	3 1.8	2 2.5	0 0	2 1.3	6 2.4	6 2.4	12 2.4
11. 家族の仲が悪い	0 0	1 1.3	1 0.6	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	1 0.4	1 0.2
12. 他に帰るところがない	2 2.0	0 0	2 1.1	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	2 0.8	0 0	2 0.4
13. その他	15 14.9	9 11.7	24 13.1	1 1.4	6 6.3	7 4.1	2 2.5	0 0	2 1.3	18 7.1	15 6.1	33 6.5
14. わからない	7 6.9	7 9.1	14 7.7	5 6.8	6 6.3	11 6.5	8 10.0	7 9.6	15 9.7	20 7.9	20 8.2	40 7.9
不明			5 2.7			2 1.2			1 0.7			8 1.6
計	101	77	183	73	95	170	80	73	154	254	245	507

付表 2-3 帰宅したときの気持とその理由との関連

その理由	帰宅したときの気持											
	うれしい気持				何とも感じない				つまらない気持			
	2	4	6	全体	2	4	6	全体	2	4	6	全体
1. 家族の誰かがいる	13 13.7	11 8.8	10 8.5	34 10.1	3 9.1	1 4.8		4 5.6	2 5.3			2 3.3
2. ゆっくりできる	13 13.7	36 28.8	64 54.2	113 33.4	2 6.1	2 9.5	1 5.6	5 6.9	1 2.6			1 1.7
3. 好きなものが食べられる	3 3.2	11 8.8	3 2.5	17 5.0					1 2.6			1 1.7
4. 安全である	2 2.1	2 1.6	1 0.8	5 1.5	3 9.1			3 4.2				
5. 自由である	27 28.4	36 28.8	26 22.0	89 26.3	1 3.0	3 14.3	1 5.6	5 6.9	2 5.3			2 3.3
6. 家族と話ができる	12 12.6	23 18.4	8 6.8	43 12.7	2 6.1			2 2.8				
7. 家に帰るのは当然	3 3.2	1 0.8	1 0.8	5 1.5	9 27.3	10 47.6	9 50.0	28 38.9	1 2.6	1 6.7		2 3.3
8. 家に帰ったとき誰もいない	3 3.2	1 0.8		4 1.2	3 9.1	3 14.3	1 5.6	7 9.7	15 39.5	6 40.0	3 42.8	24 40.0
9. しごとをさせられる	1 1.1			1 0.3	2 6.1			2 2.8	1 2.6		1 14.3	2 3.3
10. 家族がうるさい	1 1.1			1 0.3	2 6.1			2 2.8	2 5.3	3 20.0	2 28.6	7 11.7
11. 家族の仲が悪い									1 2.6			1 1.7
12. 他に帰るところがない	1 1.1			1 0.3					1 2.6			1 1.7
13. その他	11 11.6	1 0.8	2 1.7	14 3.3	3 9.1			3 4.2	6 15.8	4 26.7		10 16.7
14. わからない	1 1.1	1 0.8	2 1.7	4 0.6	3 9.1	2 9.5	6 33.3	11 15.3	5 13.2	1 6.7	1 14.3	7 11.7
不明	4 4.2	2 1.6	1 0.8	7 2.1								
計	95	125	118	338	33	21	18	72	38	15	7	60

付表 3-1 自分の家はどのようなところか

項目	性		学		年		2			4			6			全 体								
	男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計							
																		人	%	人	%	人	%	人
1. 子どもが生まれ育つ	20	6.8	22	9.9	42	8.1	11	5.8	13	4.9	24	5.3	11	4.8	4	2.0	15	3.5	42	5.9	39	5.7	81	5.8
2. 寝たり休んだりする	25	8.5	6	2.7	31	6.0	9	4.7	9	3.4	18	4.0	22	9.6	9	4.6	31	7.3	56	7.8	24	3.5	80	5.7
3. 父母がいっしょにくらす	22	7.5	18	8.1	40	7.7	5	2.6	8	3.0	13	2.9	5	2.2	9	4.6	14	3.3	32	4.5	35	5.1	67	4.8
4. 親子がいっしょにくらす	44	15.3	44	19.4	88	17.0	46	24.2	67	25.3	113	24.8	55	23.9	48	24.5	103	24.2	145	20.4	159	23.1	304	21.7
5. 食べもの着るものなど必要なものがある	41	13.9	19	8.6	60	11.6	13	6.8	13	4.9	26	5.7	8	3.5	2	1.0	10	2.3	62	8.7	34	5.0	96	6.9
6. 子どもをりっぱな人間に育てる	44	15.3	40	17.6	84	16.2	32	16.8	41	15.5	73	16.0	21	9.1	21	10.7	42	9.9	97	13.7	102	14.8	199	14.2
7. 習慣や財産などを守る	18	6.4	6	2.3	24	4.6	13	6.8	3	1.1	16	3.5	4	1.7	3	1.5	7	1.6	35	5.0	12	1.6	47	3.4
8. 病人・年よりを守り、家族がいたわりあう	22	7.5	23	10.4	45	8.7	18	9.5	43	16.2	61	13.4	45	19.6	44	22.4	89	20.9	85	11.9	110	16.1	195	13.9
9. 家族がおもしろく楽しくすごす	37	12.5	37	16.7	74	14.3	30	15.8	52	19.6	82	18.0	49	21.3	50	25.5	99	23.2	116	16.2	139	20.4	255	18.2
10. 友達やお客さんなどときあう	16	5.4	8	3.6	24	4.6	5	2.6	5	1.9	10	2.2	9	3.9	3	1.5	12	2.8	30	4.2	16	2.3	46	3.3
11. その他	0	—	0	—	0	—	1	0.5	2	0.8	3	0.7	0	—	2	1.0	2	0.5	1	0.1	4	0.6	5	0.4
12. わからない	3	1.0	2	0.9	5	1.0	7	3.7	9	3.4	16	3.5	1	0.4	1	0.5	2	0.5	11	1.5	12	1.8	23	1.6
計	292		225		517		190		265		455		230		196		426		712		686		1398	

付表 3-2 自分の家をよくするにはどうあったらよいか

項目	性		学		年		2			4			6			全 体								
	男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計							
																		人	%	人	%	人	%	人
1. もっと子ども(兄弟)がたくさんいる	47	8.2	39	10.9	86	9.2	13	5.9	19	6.8	32	6.4	9	4.7	9	5.7	18	5.1	69	7.0	67	8.4	136	7.6
2. もっとゆつくり寝たり休んだりできる	48	8.2	10	2.9	58	6.2	14	6.3	12	4.3	26	5.2	24	12.4	9	5.7	33	9.4	86	8.6	31	3.9	117	6.6
3. もっと父母が仲よくくらす	55	9.4	38	10.9	93	10.0	13	5.9	15	5.4	28	5.6	12	6.2	12	7.6	24	6.8	80	8.0	65	8.3	145	8.1
4. もっと父母が家に長くいる	60	10.5	39	10.9	99	10.6	30	13.6	42	15.1	72	14.4	25	13.0	30	19.0	55	15.7	115	11.6	111	14.0	226	12.7
5. もっと食べもの、着るものなどたくさんある	72	12.3	35	10.0	107	11.5	20	9.0	12	4.3	32	6.4	8	4.1	2	1.3	10	2.8	100	10.0	49	6.2	149	8.4
6. もっと子どもをきちんとしつける	44	7.5	31	8.9	75	8.0	17	7.7	27	9.7	44	8.8	10	5.2	7	4.4	17	4.8	71	7.1	65	8.3	136	7.6
7. もっと習慣や財産などを大切にす	59	10.1	25	7.2	84	9.0	21	9.5	23	8.3	44	8.8	8	4.1	5	3.2	13	3.7	88	8.8	53	6.8	141	7.9
8. もっと病人・年よりなどを大切にする	56	9.6	36	10.3	92	9.9	26	11.8	39	14.0	65	13.0	28	14.5	28	17.7	56	16.0	110	11.0	103	13.1	213	12.0
9. もっと家族がおもしろく楽しくすごす	79	13.7	56	15.8	135	14.5	40	18.1	55	19.8	95	19.0	48	24.9	40	25.3	88	25.1	167	16.9	151	19.1	318	17.8
10. もっと友達やお客さんがきてくれる	47	8.1	35	10.0	82	8.8	20	9.0	26	9.4	46	9.2	12	6.2	5	3.2	17	4.8	79	7.9	66	8.4	145	8.1
11. そ の 他	12	2.1	6	1.7	18	1.9	2	0.9	3	1.1	5	1.0	1	0.5	0	0	1	0.3	15	1.5	9	1.1	24	1.3
12. わからない	1	0.2	2	0.6	3	0.3	5	2.3	5	1.8	10	2.0	8	4.1	11	7.0	19	5.4	14	1.4	18	2.3	32	1.8
計	580		352		932		221		278		499		193		158		351		994		788		1782	

付表 4-1 児童の役割分担（全体）

項目	2			4			6			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
ひじょうによくやっている	人 8 8.9	人 16 20.8	人 24 13.6	人 7 9.6	人 6 6.3	人 13 7.7	人 2 2.5	人 4 5.5	人 6 3.9	人 17 6.7	人 26 10.6	人 43 8.6
わりによくやっている	26 26.3	22 28.6	48 27.3	22 30.1	48 50.5	70 41.7	24 29.6	35 47.9	59 38.3	72 28.5	105 42.9	177 35.5
どちらともいない	25 25.3	25 32.5	50 28.4	30 41.1	32 33.7	62 36.9	38 46.9	28 38.4	66 42.9	93 36.8	85 34.7	178 35.7
あまりやっていない	31 31.3	14 18.2	45 25.6	12 16.4	9 9.5	21 12.5	15 18.5	5 6.8	20 13.0	58 22.9	28 11.4	86 17.3
まったくやっていない	9 9.1	0 0	0 5.1	2 2.7	0 0	2 1.2	2 2.5	1 1.4	3 1.9	13 5.1	1 0.4	14 2.8
計	99	77	176	73	95	168	81	73	154	253	245	498

付表 4-2 児童の役割分担 (事項別)

(1) せんとくもの干しやかたづけ

学年 程度 性別	2 年			4 年			6 年			全 体		
	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
いつもする	7 6.8	7 8.8	14 7.7	1 1.4	6 6.3	7 4.1	2 2.5	7 9.6	9 5.8	10 3.9	20 8.0	30 5.9
ときどきする	37 35.9	37 46.2	74 40.4	36 48.6	62 64.5	98 57.7	45 55.5	52 71.2	97 63.1	118 45.7	151 60.7	269 53.1
ほとんどしない	44 42.7	27 33.7	71 38.8	32 43.2	24 25.0	56 32.9	31 38.3	14 19.2	45 29.2	107 41.5	65 26.1	172 33.9
N. A.	15 14.6	9 11.3	24 13.1	5 6.8	4 4.2	9 5.3	3 3.7	0 0	3 1.9	23 8.9	13 5.2	36 7.1
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
理由	① 17.3 ② 17.7 ② 15.8			② 29.0 ② 33.3 ② 31.5			② 33.8 ② 39.1 ② 36.3			② 24.4 ② 29.9 ② 27.1		
2	⑦ 15.4	① 12.7	① 15.3	① 24.6	① 20.4	① 22.2	① 19.5	① 21.7	① 20.5	① 20.0	① 18.3	① 19.1
3	② 14.4	⑥⑬ 11.4	⑦⑬ 9.8	⑦ 14.5	④ 12.9	③ 10.5	⑥ 15.6	⑥ 11.6	⑥ 13.7	⑦ 11.2	④ 10.8	⑥ 9.0

(2) 食事のしたくやかたづけ

いつもする	11 10.7	20 25.0	31 16.9	10 13.5	33 34.4	43 25.3	8 9.9	22 30.1	30 19.5	29 11.2	75 30.1	104 20.5
ときどきする	49 47.6	48 60.0	97 53.0	35 47.3	51 53.1	86 50.6	41 50.6	44 60.3	85 55.2	125 48.4	143 57.5	268 52.9
ほとんどしない	30 29.1	8 10.0	38 20.8	24 32.4	10 10.4	34 20.0	30 37.0	6 8.2	36 23.4	84 32.6	24 9.6	108 21.3
N. A.	13 12.6	4 5.0	17 9.3	5 6.8	2 2.1	7 4.1	2 2.5	1 1.4	3 1.9	20 7.8	7 2.8	27 5.3
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
理由	② 25.0 ② 30.4 ② 27.3			② 39.1 ② 35.5 ② 37.0			② 24.7 ② 37.7 ② 30.8			② 28.8 ② 34.4 ② 31.6		
2	① 14.4	① 17.7	① 15.8	① 14.5	④ 23.7	④ 14.2	⑥ 23.4	④ 21.7	⑥ 15.8	① 14.4	④ 18.7	① 13.4
3	⑥⑬ 7.7	⑪ 11.4	⑬ 8.2	③ 13.0	⑪ 12.9	① 11.1	① 14.3	①③ 11.6	① 13.0	⑥ 12.0	① 12.4	④ 10.4

(3) 部屋のそうじ

いつもする	6 5.8	7 8.8	13 7.1	6 8.1	11 11.5	17 10.0	10 12.3	11 15.1	21 13.6	22 8.5	29 11.6	51 10.1
ときどきする	51 49.6	41 51.2	92 50.3	46 62.1	59 61.4	105 61.8	54 66.7	53 72.6	107 69.5	151 58.6	153 61.5	304 60.0
ほとんどしない	33 32.0	25 31.2	58 31.7	19 25.7	24 25.0	43 25.3	17 21.0	9 12.3	26 16.9	69 26.7	58 23.3	127 25.0
N. A.	13 12.6	7 8.8	20 10.9	3 4.1	2 2.1	5 2.9	0 0	0 0	0 0	16 6.2	9 3.6	25 4.9
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
理由	② 19.2 ② 19.0 ② 19.1			② 28.2 ② 34.4 ② 31.7			② 41.6 ② 54.3 ② 47.6			② 28.6 ② 35.1 ② 31.8		
2	① 13.5	① 16.5	① 14.8	① 19.7	③ 16.1	① 16.5	① 20.8	⑥ 11.4	① 15.6	① 17.5	① 13.6	① 15.6
3	③ 10.6	⑥ 12.7	⑥ 10.9	③ 16.9	① 14.0	③ 16.5	④⑥⑦ 6.5	① 10.0	⑥ 8.8	③ 10.7	⑥ 9.5	③ 11.1

- そうする理由
(選択項目)
- ① 父母に言いつけられるから
 - ② 自分でできることだから
 - ③ みんな働いているから
 - ④ 自分が家庭をつくるとき役立
立つと思うから
 - ⑤ 家庭科で勉強したから
 - ⑥ 自分以外の家族がしてしま
うから
 - ⑦ 仕事が嫌いだから
 - ⑧ 自分が大きくなったとき役
立つと思わないから
 - ⑨ 家庭科で勉強したことと家
のやり方と違うから
 - ⑩ 男だから
 - ⑪ 女だから
 - ⑫ あてはまる仕事がないから
 - ⑬ わからない

〈4〉お父さん・お母さんに頼まれた買物

学年 性別	2 年			4 年			6 年			全 体		
	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
いつもする	11 10.7	17 21.3	28 15.3	15 20.3	22 22.9	37 21.8	19 23.5	23 31.5	42 27.3	45 17.4	62 24.9	107 21.1
ときどきする	48 46.6	40 50.0	88 48.1	41 55.3	61 63.6	102 60.0	51 63.0	42 57.5	93 60.4	140 54.3	143 57.4	283 55.8
ほとんどしない	30 29.1	17 21.3	47 25.7	15 20.3	8 8.3	23 13.5	10 12.3	8 11.0	18 11.7	55 21.3	33 13.3	88 17.4
N . A .	14 13.6	6 7.4	20 10.9	3 4.1	5 5.2	8 4.7	1 1.2	0 0	1 0.6	18 7.0	11 4.4	29 5.7
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
	選択項目			選択項目			選択項目			選択項目		
理由 第1位	② 21.2	① 25.3	② 21.9	① 32.9	② 37.6	② 35.0	② 45.5	② 41.4	② 43.5	② 31.5	② 33.9	② 32.7
2	① 18.3	② 22.8	① 21.3	② 31.4	① 22.6	① 27.0	① 29.9	① 27.1	① 28.6	① 25.9	① 24.8	① 25.4
3	⑥ 9.6	③ 12.7	⑥ 8.2	⑦ 8.6	④ 10.8	④ 6.7	③ 7.8	③ 11.4	③ 9.5	⑥ 7.6	③ 9.5	③ 8.1

〈5〉病人・年より・小さい子の世話

いつもする	8 7.8	12 15.0	20 10.9	2 2.7	14 14.6	16 9.4	8 9.9	14 19.2	22 14.3	18 7.0	40 16.1	58 11.4
ときどきする	31 30.1	36 45.0	67 36.6	23 31.1	42 43.7	65 38.2	29 35.8	24 32.9	53 34.4	83 32.1	102 41.0	185 36.5
ほとんどしない	47 45.6	25 31.2	72 39.4	41 55.4	31 32.3	72 42.4	41 50.6	32 43.8	73 47.4	129 50.0	88 35.3	217 42.8
N . A .	17 16.5	7 8.8	24 13.1	8 10.8	9 9.4	17 10.0	3 3.7	3 4.1	6 3.9	28 10.9	19 7.6	47 9.3
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
	選択項目			選択項目			選択項目			選択項目		
理由 第1位	② 17.3	② 20.3	② 18.6	⑬ 26.5	② 27.0	② 24.8	② 28.9	② 31.3	② 30.1	② 22.2	② 26.0	② 24.0
2	⑬ 15.4	⑬ 11.4	⑬ 13.7	② 22.1	⑬ 19.1	⑬ 22.3	⑥ 18.4	⑬ 17.9	⑬ 17.5	⑬ 19.0	⑬ 16.2	⑬ 17.6
3	⑦ 8.7	④ 10.1	⑫ 9.8	⑫ 11.8	④ 11.2	⑫ 10.8	⑬ 17.1	⑫ 14.9	⑥ 15.4	⑫ 10.5	⑫ 11.1	⑫ 10.8

〈6〉家族の相談相手

いつもする	7 6.8	4 5.0	11 6.0	11 14.9	11 11.5	22 12.9	5 6.2	8 11.0	13 8.4	23 8.9	23 9.2	46 9.1
ときどきする	35 34.0	25 31.3	60 32.8	14 18.9	26 27.1	40 23.5	28 34.6	25 34.2	53 34.4	77 29.8	76 30.5	153 30.2
ほとんどしない	43 41.7	37 46.2	80 43.7	43 58.1	50 52.0	93 54.8	46 56.8	37 50.7	83 54.0	132 51.2	124 49.9	256 50.4
N . A .	18 17.5	14 17.5	32 17.5	6 8.1	9 9.4	15 8.8	2 2.5	3 4.1	5 3.2	26 10.1	26 10.4	52 10.3
計	103	80	183	74	96	170	81	73	154	258	249	507
	選択項目			選択項目			選択項目			選択項目		
理由 第1位	⑬ 12.5	⑬ 25.3	⑬ 18.0	⑬ 33.8	⑬ 44.9	⑬ 40.1	⑬ 45.5	⑬ 40.3	⑬ 43.1	⑬ 28.5	⑬ 37.0	⑬ 32.6
2	① 10.6	④ 12.7	② 10.4	② 17.6	② 16.9	② 17.2	④ 20.8	② 19.4	② 17.4	② 14.1	② 15.3	② 14.7
3	② 10.6	② 10.1	①④⑥ 8.7	④ 14.7	④ 11.2	④ 12.7	② 15.6	⑥ 16.4	④⑥ 13.9	④ 12.9	⑥ 11.5	④ 11.6

そうする理由

〔選択項目〕

- ① 父母に言いつけられるから
- ② 自分にできることだから
- ③ みんな働いているから
- ④ 自分が家庭をつくるとき役立つと思うから
- ⑤ 家庭科で勉強したから
- ⑥ 自分以外の家族がしてしまうから
- ⑦ 仕事が嫌いだから
- ⑧ 自分が大きくなったとき役立つと思わないから
- ⑨ 家庭科で勉強したことと家のやり方と違うから
- ⑩ 男だから
- ⑪ 女だから
- ⑫ あてはまる仕事がないから
- ⑬ わからない

付表 4-3 家族の役割分担

項目	学年 性別	2 年			4 年			6 年			計		
		男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
〈1〉 子どものしつけ	父	39 29.5	28 30.1	67 29.8	16 21.9	13 14.0	29 17.5	17 22.7	10 14.2	27 18.6	72 25.7	51 19.9	123 22.9
	母	68 51.5	55 59.1	123 54.7	48 65.8	77 82.7	125 75.3	53 70.7	56 80.0	109 75.2	169 60.4	188 73.5	357 66.7
	その他	18 13.6	5 5.4	23 10.2	5 6.8	2 2.2	7 4.2	4 5.3	2 2.9	6 4.1	27 9.6	9 3.5	36 6.7
	わからない	7 5.3	5 5.4	12 5.3	4 5.5	1 1.1	5 3.0	1 1.3	2 2.9	3 2.1	12 4.3	8 3.1	20 3.7
	計	132	93	225	73	93	166	75	70	145	280	256	536
〈2〉 近所とのつきあい	父	26 22.4	19 20.0	45 21.3	5 6.8	7 7.3	12 7.1	10 13.3	0	10 6.8	41 15.5	26 9.9	67 12.7
	母	51 44.0	50 52.7	101 47.9	34 46.7	67 69.8	101 59.8	52 69.4	51 71.9	103 70.6	137 52.0	168 64.2	305 58.0
	その他	23 19.8	18 18.9	41 19.4	22 30.1	14 14.6	36 21.3	10 13.3	16 22.5	26 17.8	55 20.8	48 18.3	103 19.6
	わからない	16 13.8	8 8.4	24 11.4	12 16.4	8 8.3	20 11.8	3 4.0	4 5.6	7 4.8	31 11.7	20 7.6	51 9.7
	計	116	95	211	73	96	169	75	71	146	264	262	526
〈3〉 親類とのつきあい	父	41 30.8	36 35.3	77 32.8	26 36.1	22 23.4	48 28.9	30 42.3	30 42.9	60 42.6	97 35.1	88 33.1	185 34.1
	母	49 36.9	36 35.3	85 36.1	21 29.2	41 43.6	62 37.3	15 21.1	21 30.0	36 25.5	85 30.8	98 36.8	183 33.8
	その他	24 18.0	19 18.6	43 18.3	15 20.8	19 20.2	34 20.5	17 23.9	7 10.0	24 17.0	56 20.3	45 16.9	101 18.6
	わからない	19 14.3	11 10.8	30 12.8	10 13.9	12 12.8	22 13.3	9 12.7	12 17.1	21 14.9	38 13.8	35 13.2	73 13.5
	計	133	102	235	72	94	166	71	70	141	276	266	542
〈4〉 家庭生活するお金を 家庭へ入れる	父	81 64.8	63 66.3	144 65.5	54 74.0	82 87.2	136 81.4	69 89.6	58 81.7	127 85.7	204 74.2	203 78.0	407 76.1
	母	33 26.4	23 24.2	56 25.5	12 16.4	6 6.4	18 10.8	6 7.8	12 16.9	18 12.2	51 18.5	41 15.8	92 17.2
	その他	4 3.2	7 7.4	11 5.0	3 4.1	1 1.1	4 2.4	1 1.3	0 0	1 0.7	8 2.9	8 3.1	16 3.0
	わからない	7 5.6	2 2.1	9 4.1	4 5.5	5 5.3	9 5.4	1 1.3	1 1.4	2 1.4	12 4.4	8 3.1	20 3.7
	計	125	95	220	73	94	167	77	71	148	275	260	535
〈5〉 部屋のそうじ	父	22 20.0	19 22.1	41 20.9	10 13.7	6 6.3	16 9.5	13 16.5	6 8.3	29 18.0	45 17.2	31 12.3	76 14.8
	母	74 67.3	59 68.6	133 67.8	41 56.1	77 81.0	118 70.2	64 81.0	59 82.0	123 76.5	179 68.2	195 77.0	374 72.6
	その他	4 3.6	3 3.5	7 3.6	4 5.5	1 1.1	5 3.0	0 0	2 2.8	2 1.2	8 3.1	6 2.4	14 2.7
	わからない	10 9.1	5 5.8	15 7.7	18 24.7	11 11.6	29 17.3	2 2.5	5 6.9	7 4.3	30 11.5	21 8.3	51 9.9
	計	110	86	196	73	95	168	79	72	161	262	253	515

付表 4-4 男女による役割分担の違いの認識

項目	2			4			6			全 体		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
男も女も同じようにする	9 8.7%	8 10.0%	17 9.3%	14 19.7%	14 15.1%	28 17.1%	24 29.6%	12 16.4%	36 23.4%	47 18.4%	34 13.8%	81 16.2%
男でも女でもどちらでもよい	51 49.5%	47 58.8%	98 53.6%	32 45.1%	38 40.9%	70 42.7%	28 34.6%	32 43.8%	60 39.0%	111 43.5%	117 47.6%	228 45.5%
男がすればよい	2 1.9%	2 2.5%	4 2.2%	1 1.4%	0 0%	1 0.6%	0 0%	0 0%	0 0%	3 1.2%	2 0.8%	5 1.0%
女がすればよい	25 24.3%	16 20.0%	41 22.4%	17 23.9%	34 36.6%	51 31.1%	21 25.9%	22 30.1%	43 27.9%	63 24.7%	72 29.3%	135 26.9%
わからない	16 15.5%	7 8.8%	23 12.6%	7 9.9%	7 7.5%	14 8.5%	8 9.9%	7 9.6%	15 9.7%	31 12.2%	21 8.5%	52 10.4%
計	103	80	183	71	93	164	81	73	154	255	246	501